文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業「村上知彦コレクションに基づくサブカルチャー史アーカイブモデルの構築」

村上知彦コレクション整理事業　紹介

■「村上知彦コレクション」と文化庁アーカイブ推進支援事業での整理作業について

京都国際マンガミュージアムにおいて現在整理が進められている「村上知彦コレクション」（以下、村上コレクション）は、マンガ評論家・編集者として活躍されてきた村上知彦氏の所蔵する、マンガ文化を中心としながら領域横断的に拡がる60年代以降の関西文化シーンが克明に記録された、膨大な一次資料群である。

京都精華大学国際マンガ研究センターでは2016年度より文化庁アーカイブ推進支援事業の援助を受けつつ、同コレクションの整理事業を進めてきた（「村上知彦コレクションに基づくサブカルチャー史アーカイブモデルの構築」）。この整理事業では、京都国際マンガミュージアムへの資料群の移送、そしてこうした文化シーンにまつわるいわば「雑多な」一次資料群のデータベース的な整理だけでなく、事業のもう一つの柱として村上知彦氏のオーラルヒストリー調査を実施し両者を結びつけることによって、各資料の文化シーンにおける位置関係や有機的なつながりを利用者が追うことのできる、物語性を有した新しいアーカイブモデルの構築を目指している。

■ 2018年度の整理事業について

2018年度では、2016年度・2017年度に引き続き、村上知彦事務所に所蔵されている資料群について、簡易整理・京都国際マンガミュージアムへの移送・資料情報登録を進めるとともに、一部の貴重資料の全ページ撮影・画像データ化を行った。対象としたのは、村上知彦氏自身によって1970年代に刊行されていたミニコミ誌（『週刊月光仮面』『純粋桃色通信』など）である。

また、本事業の重要な柱のひとつである、資料の背景情報に関する村上知彦氏への聞き取り調査についても継続した。2018年度では、ミニコミ誌資料や映画関係資料等に関する背景調査を中心とした。これらのインタビュー記録は公開へと向けて書き起こしたものの校正が進められている。

以下では、そうした資料背景にまつわる2016年度～2018年度にかけての村上知彦氏へのインタビュー調査について、一部抜粋・掲載する。2017年2月21日に実施されたこのインタビュー調査では、村上コレクション内の資料をもとにしつつ、70年代末の「エロ劇画」ブームに関する動きについて聞き取りを行った。

（雑賀忠宏）

村上知彦コレクション整理作業記録

第7回インタビュー調査　抜粋（2017年2月21日於 村上知彦氏宅）

インタビュアー：雑賀忠宏（京都精華大学国際マンガ研究センター）/ 日高利泰（京都大学）/ 伊藤遊（京都精華大学国際マンガ研究センター）

村上　「三流劇画」については、『別冊新評』での特集がありましたね。『石井隆の世界』が先に出て、そのあと『三流劇画の世界』。『三流劇画の世界』は『迷宮』の編集で出たんです。

――― **そうなんですか。**

一方で、この『プレイガイドジャーナル』の、「迷宮」の高宮成河が司会をして、「三流劇画特集」というのをやったのが1978年の8月号。

――― **「君は三流劇画を見たか」。本当だ。「迷宮」が編集って大きく書いてありますね。**

高宮の前文があって、序論の「三流劇画論」。これは相田洋とあるから米やん（米澤嘉博）だ。米澤嘉博が序論を書いて、作品紹介があって、亀和田武、高取英、山田博良の座談会。高宮と米やんが司会をして。最後に「迷宮」の広告も入れて。

――― **そして、次ページはいしいひさいちさんの漫画が関係なく始まる（笑）。まあまあ大きな特集ですね。**

それで、『プガジャ』の特集が78年8月号でしょう。9月に読売テレビ「11ＰＭ」が『プガジャ』を見て、取り上げたいと言ってきて僕も出演しました。ここにその台本があります。

――― **「ピンク劇画の主役たち」。**

全国放送なので、そういうので取り上げられたばっかりに『漫画エロジェニカ』が摘発されたともいわれてます。

――― **目を付けられてしまった。**

高取はそう言っておりました。

台本に手書きのメモが入っていますね。戦後マンガの歴史が書いてある。しゃべるためのメモですか。

たぶんそうです。

（台本を読む）「ピンクといってもエロエロ……」、いろいろありますじゃなくて「エロエロあります」と言っています。「最近のピンク劇画は面白いらしい。」「本当はエロ劇画とか三流劇画って言うんでしょう」という会話が。「建前はピンク、本音はエロ。3尺下がって三流という」。「しばらく、まずはエロ劇画の世界をどうぞ」。ピンクとエロは違うという前提なんですね。

番組としては、そうみたいですね。

何が違うんでしょう。「ピンク」ってピンク映画ということですか。

それに近いですかね。ピンクというのは藤本義一世代のイメージなのかな。俗っぽいエロチシズムという。「エロ」はストレートすぎるのかも。

台本では、編集部のVTRから始まっていますね。ナレーションで「エロ劇画といえば……月刊劇画誌は増刊も含めて約180誌」。そんなにあるんですね。「発行部数は平均6、7万部」。「出版社数30社以上。そのほとんどが東京に集中している」。これは面白い資料ですね。

台本は取材を元に構成作家が書いています。藤本義一なんかはまったく台本のとおりしゃべっていませんけどね。

なるほど。「1部200円で自動販売機、スタンド書店で売られる」。これも実際に放送されたときの映像は、もう残っていないんですかね。

分からない。それは読売テレビに聞いてみないと。

聞いてみないと分からないですね。でも、こういうのはあまり残していなさそうでもありますね。「エロ劇画通史」で、村上先生が登場する。「劇画とマンガの違いはどこに」というところから始まっていますね。「手塚マンガからエロ劇画に至る道を簡潔に解説」。解説してくださいみたいな依頼になっている。

無茶ですよね。そのためにつくられたのがこれ（手書きのメモ）です。

なるほど。この挟み込んである原稿用紙。そして清水おさむさんが出て、その作品の紹介があって。中島史雄さん、小多魔若史さん……。皆さん、27歳とか25歳なんですね。

うん。これは東京で撮ってきたVTRのインタビューですね。

中島史雄「いたずら遊戯」。それを紹介していたんですか。すごいな、テレビ。

「11PM」ですから。11時すぎたら何やってもよかった。「11PM」は過激だったから。

そして通史の後半、「エロ劇画の劇画界における地位について」。そして編集者たちのインタビュー。亀和田武さんとかが、当時29歳なんですね。当たり前だけど若いですね。『エロジェニカ』、『劇画アリス』、『漫画スカット』、『官能劇画』……。高取英さんが出てますね。『エロジェニカ』は14.5万部となっていてやっぱり多いですね。でも本当かな、という。

絶対違うと思う。知らんけど（笑）。

これは井筒和幸監督ですね。

うん。井筒監督。ピンク映画撮ってた頃だね。紹介されてる「肉色の海」はピンクの新東宝で配給されたやつ。

「エロ映画とエロ劇画の共通点」。

井筒監督も生で出ていたのかな。覚えてないけど、台本を見ると出演していますね。

この図はスタジオの座席なんですか。

そう。台本に指示してある。

そしてまた編集者たちの話が出てきて、エロ劇画を読んだ感想をパーソナリティーが言う。そして作品を紹介しながら終わる。へえ、これは面白いですね。この放送が9月26日。

そうそう。8月のスケジュールが載る『プガジャ』が出るのが7月末なんです。

さすがテレビ。早いですね。

7月末に『プガジャ』見て、8月に取材して9月にオンエアしてる。

『プガジャ』の特集と同じ年ということですね。

確かそう。1978年です。

1970年代後半に一気に、いろいろ注目が集まってきて……。一般的にとは言わないけれども、ある程度サブカルチャーというか、そういう世界では、なんかすごいぞみたいな感じになっていたということですかね。

うん。なっていたというか、無理やりしたんですね、「迷宮」中心に。盛り上げようとして、意図的に仕掛けたようです。

いわゆる「三流劇画」みたいな言い回しは、一種のテクニカルワードなんですか。

「三流劇画」と言いだしたのは「迷宮」だと思うんですけどね。

――――　じゃあ、高取さんたちが言っていたわけじゃないんですね、もちろん。

高取なんかは、それについて読者がいろいろ論争したりするのを誌面でやらせていた。

――――　なるほど。うまいこと使ったと。

うん。

――――　こっちの1982年の『マンガ宝島』にも、北崎正人さんの「三流劇画ムーブメント・エロ劇画ルネッサンスが残したもの」という文章が載っていますけれども。始まりは、1977年に『漫画新批評大系』が特集を組んだと。

そうそう。『漫画新批評大系』が1977年か。

――――　「1978年の『プレイガイドジャーナル』に『エロジェニカ』、『アリス』、『官能劇画』の編集長座談会が組まれて、この座談会を契機として三流劇画ムーブメントが始まった」と書いてありますね。

その座談会プラス、『11PM』ね。テレビに取り上げられたということがやっぱり大きい。

――――　テレビでぱっと一気に広がっていく。「三流エロ劇画」みたいな言葉が、ある種一人歩きしていくみたいなことなんですかね。確かにここでは、「いま考えると三流劇画ムーブメントとは、日陰の存在であったエロ劇画にスポットライトを浴びせるマスコミ戦略のことを指していたと言っていいだろう」と書いてありますね。

「迷宮」も現物がありますので、出しましょうか。『漫画新批評大系』の1977年、冬の第2期1号。「三流劇画ミニマップ」。これですね。特集じゃなく評論。

――――　これが「上」になっていますね。じゃあ、次に続いたのかな。「三流劇画誌不完全リスト」。みのり書房が『OUT』を出して、そこから『月刊Peke』を出しつつ、一方では『官能劇画』みたいな「三流劇画」誌も出していたということなんですね。

で、これがパート2。78年春の第2期2号。続きというか、清水おさむと吉田英一のインタビューですね。

――――　「不完全リスト」をみていくと、『漫画スカット』と『官能劇画』がみのり書房。『漫画大快楽』が檸檬社。『エロジェニカ』が海潮社で、『劇画アリス』がアリス出版ですね。「全国三流劇画共闘会議」みたいな署名で。

それが後に「三流劇画全共闘」と言われたいわれなんです。別に「三流劇画全共闘」というのがあったわけではなくて、そういうペンネームで。

――――　ああ、ペンネームで。一種のしゃれですよね。

しゃれです。それが「三流劇画全共闘というのがあった」という既成事実になったり、全共闘くずれの運動ごっこと言われたり、いろいろややこしいことになって。

――――　さっきの、『マンガ宝島』に載っている1982年段階の文章でも、三流劇画ブームはマスコミの目を引く戦略以上のものではなかったのに、全共闘と結び付けると誰が言いだしたのか、みたいなことが書いてありましたけど。

亀和田武とか高取英とかが関わっているから、どうしてもそういうイメージの方が分かりやすいという。

――――　確か、当時の一般売り週刊誌とかでもそんな記事がありましたね。前にちょっと劇画ブームについて調べたときに見ました。「全共闘崩れがつくって売る三流劇画誌」みたいな記事になっていましたけれども。

確かに周辺にはいたけど、高取はべつに、世代的には全共闘じゃないんです。僕らと一緒で。亀和田さんは完全にセクトと関わった世代かな。

――――　その辺があってやっぱり、イメージとして既成事実化されてしまったというのがあるんでしょうね、全共闘の。

そうですね。確かにそういうレトリックを使ってやっていたから。

――――　ああ、自分が。

うん。それも戦略の一つといえば一つで。

――――　全共闘的なもののパロディーというか、スタイルだけ流用してやるというのは、同人誌の中のマンガ評論の流れとも結び付いているということになるんでしょうね。

いまのこういうエロと結び付いたときにそれが表に出やすかったというか、出しやすかった。もちろん、映画なんかで大島渚がやっていたようなこととかと当然、イメージとしては結び付いて、エロの何が悪いという主張になっていくという。

――――　なるほど。やっぱり、ムーブメントとして、編集者とか読者の側でつくっていくみたいなことが始まったというか。

そうですね。

――――　マンガの描き手自身がじゃなくて、それをどういうフレームの中に入れるかというか、パッケージングするかという動きが出てくるのは、ニューウエーブとかと同時代的というか、

一緒ですね。「迷宮」の中で、特に熱心に推進していたのは誰なんですか。

米やんだな。亜庭じゅんではないな。

それはどういうバックボーンというか、意図があったというふうに、村上さんは解釈しているんですか。

意図があったのかどうかはよく分からないんですけどね。でも、要するに、エロマンガとか、グロテスクというのは人間のテーマの一つだから。米澤嘉博の『戦後エロマンガ史』を、今日参照しようと思って出してきたんですけれど、この本だと最後の方ですよね。『戦後エロマンガ史』の記述でいうと、この辺からかな。「二九　三流劇画ブーム・ムーブメント」、1978 年。1977 年の『漫画新批評大系』、三流劇画ミニマップから、78 年夏に『プレイガイドジャーナル』8 月号があって、秋には『11PM』がエロ劇画特集。あと『日本読書新聞』9 月 18 日号で、僕が「三流劇画は燃えている」という文章を書いている（笑）。

12 月に『別冊新評』の石井隆特集がまず出て、翌年三流劇画の方かな。1977 年から 1978 年、1979 年にかけてですね。

こういう歴史みたいなものを共有しているということ自体が、分かってやっている感じがしますね。

誰が何を書いたか事細かにピックアップを、米澤君はしていますけど。

米澤さんお得意の。この当時から、戦後すぐのエロ雑誌とか集めていたんですか、米澤さんは。

もちろんそうだと思う。

当時は 20 代ぐらいということですよね。

どの程度かは分からないけれども、当然、集め始めてはいたと思いますけどね。

そういう関心と、『迷宮』の中で熱心にやっていくという関心が重なっているということなんですよね、きっと。

うん。このころは、さっき名前が出て来なかったけど川本耕次も『迷宮』のメンバーの一人だったと思いますけどね。『プガジャ』の座談会に出てた、『官能劇画』の山田博良のことですが。

「いまだから言えるが、ペンネームは 6 人分だが書いたのは 3 人。僕と川本と青葉である」と書いてありますね。

そのあと、『アリス』の編集を亀和田武から受け継いで「迷宮」がやっていますし。

『劇画アリス』は亀和田さんから「迷宮」そのものに編集が移ったんですね。

そうそう。

確か途中で「編集長を辞めます」、みたいな号があって。巻頭に。「亀和田は『アリス』に別れを告げた。」「が、立ち止まっているわけにはいかない。さらなる地平を目指し、『アリス』は新たな前進を開始する。期待せよ」。その冒頭の「しばしばかりのいんたーみっしょん」で「いんたーみっしょん」を平仮名にするセンスが「迷宮」ぽい。なぜ編集長は変わったんですか。

なぜかは知らないんです。亀和田さんの方の事情だと思うけど。

亀和田編集長は『劇画アリス』を辞めたあとは。

作家ですね。

編集者というよりは作家として。

うん。このころ『SF マガジン』とかに、もう書いていたし、あとコラムとかエッセーとかで活躍してた。

誌面は大きく変わったんですか。

具体的にはどうだったかな。

出版年がぱっと分からないから。

『アリス』は自販機本なので。発行年月日がまったく分からないんです。

「A - 1」しか書いていない。この「A - 1」というのはどういう意味なんですか。

その年の 1 号目ということかな。だいたい、A とか B とかいうのは分からないんだけど、その数字は月号にほぼ近い。「A - 1」だと 1 月ごろに出ている。

なるほど。確かにクリスマスネタの作品が 1 本あったから、そのころかなという気はします。『別冊新評』で書かれたエロ劇画の作家たちは、『COM』とか『ガロ』とか、少女マンガとか、マニア的、エロ的要素を持った、いわばマンガファンに仲間意識を持たせようという意味での作家たちを意識的に選んでいると、この米澤さんの本では書いていますね。

ああ、『別冊新評』での取り上げ方という。

はい。

三流劇画がニューウエーブと重なる部分とい

うのはそういうことで、三流劇画全体が必ずしも一致するわけではないんですけれども、その中のそういうマニア受けする部分としてあるのは、かなりニューウエーブの作家と重複しているところがあるという。でないと、そもそも『劇画アリス』とかになぜ坂口尚が載っているのか、まったく分からない。

――― 『ふゅーじょん ぷろだくと』の1981年9月号に、高取英さんがエロ劇画とニューウエーブは分離したという意味の文章を書いていて、そこにこんな図が。エロ劇画の円とニューウエーブの円と一流劇画の円があって。一流劇画が『ビッグコミック』とか。で、『ブッチャー』とかはエロ劇画側にずっと寄って、ニューウエーブと重なるところに『エロジェニカ』、『アリス』、『大快楽』の3冊があるみたいな。

そうね。エロ劇画のごく一部。エロ劇画がもっと幅広いもので。

――― さっきの『マンガ宝島』の文章でも、『COM』派の『アリス』と『ガロ』派の『エロジェニカ』みたいな書かれ方がされていました。『エロジェニカ』と『大快楽』の対立がマニアの間では少女漫画に理解のある『COM』派と劇画主流の『ガロ』派の対決であると言われていた、みたいな書かれ方ですね。それは、村上さん的には納得できるんですか。

分けるとしたらそうですかね。『大快楽』の方はひさうちみちおさんとか、宮西計三もいるし。

――― 宮西さんは『アリス』に載っていましたね。

あと、平口広美とかいつきたかしとかだから。

――― 近藤ようこさんとか。

近藤ようこは『アリス』です。

――― 勝又進とかも描いていますね。

そう。勝又進が描いている。だから、編集者の単なる趣味だと思います。

――― 確かに。それはそれとして、『劇画アリス』は『迷宮』がつくっていたということになるわけですね。コラムのページがやたらと充実しているというのも、その辺が背景にあるんでしょうね。

そうですね。だから、『エロジェニカ』、『大快楽』、『アリス』に共通するのは記事がいかにもマニア向けという。ほかのエロ劇画誌はそんなの一切ありませんから。

――― 実際、尖ったマンガファンは結構買っていたという感じなんですか。

実際、どの程度かは分からないね。

――― 周辺のマンガ好きとか、村上先生周辺の人々はどうでしたか。業界の実際に関わっている人も多いですけれども。

周辺にはもちろん多かったですよ。

――― ニューウエーブという枠組みが、一方では『Peke』から『アゲイン』の流れの中で出てくるのと、エロ劇画誌の中で、その後にそこに分類されて、実はそっちでも描いていたよというのは、どっちが先になるんでしょうか。

エロ劇画誌に描いていることも含めて、新しい呼び名が必要だみたいな、仕切りになっていったということだと思いますけどね。そういういままでのジャンル分けではない、それを横断するような、越境するような存在というふうに。

――― 確かに。『Peke』でニューウエーブという言葉が出始めるのが1978年で、『新批評大系』が三流劇画に注目し始める方が、時期的にはちょっと早い感じですね。

だから、実態として三流劇画の中にそういうものを持ち込んで、マニア受けを狙うというような方向性がまずあって、それを「ニューウエーブ」とくくることで何か見えてくるものとか、説明できたみたいに思える。また別の方法での名付けみたいなものが付け加わったということなのかな。

――― そういう感じなんですかね。むしろエロじゃない方向で拡張していく。エロじゃない方向に散らばっているものを集めるためにニューウエーブというふうに、あとから、出てくる感じですね。

例えば、僕なんかの感じで言うと、エロ劇画の中で面白かったのはほかにもいっぱいある。小多魔若史とかものすごく好きなんですけど。めちゃくちゃで。でも、そういうのをニューウエーブとはちょっと呼ばない。

エロ劇画のとんがっている部分というのと、その中でニューウエーブというふうに、ほかのものと交流したり、それ以外のところでも活躍している、あるいは表現しているみたいなものとはちょっと分けて、僕は考えているところがありましたけどね。

エロ劇画の面白さみたいなものは、ニューウエーブだけじゃないみたいなことも逆に言いたかったという。

（抜粋）

その他事業

江戸戯画・明治戯画・戯画本コレクションの活用

実施概要

京都精華大学国際マンガ研究センターでは、マンガの歴史をめぐる資料として江戸戯画・明治戯画・戯画本をコレクションしている。本資料は、マンガ研究家の清水勲氏が自身の研究活動のために収集したもので、2018 年度には『狂斎百図』『江戸名所道化尽』のシリーズの充実を目指し計 14 点を新規購入した。現在（2019 年 3 月時点）では、江戸戯画 249 点、明治戯画 48 点、江戸戯画本 27 点の合計 324 点を所蔵。今後、館内のみならず国内外での展示協力などへの活用を予定している。

（倉持佳代子）

＜ 2018 年度新規購入例＞

狂斎百図
河鍋狂斎 幕末～明治初期
「かれ木に花」　「犬の川ばた（歩き）」

前者は「いったん衰えたものが再び元気をとりもどすこと」で、枯山木に花が咲くように老いた夫が元気になって医者がびっくりしてい様子を描いている。後者は「食べ物の落ちていない川端では、犬はただ歩くだけ」であるように、飲食もしないで帰ってくる夫婦が描かれている。「犬川」でも通用した言葉であった。

（清水勲）

狂斎百図
河鍋狂斎 幕末～明治初期
「亭主を尻にしく」「亭主の顔に泥を塗る」

前者は「妻が夫をないがしろにして、勝手気ままに振る舞うこと」。妻のかせぎがよく、夫を喰わせている夫婦がその一例。後者は「若い男と密通し、亭主の面目を失わせる妻」を一例にしている。どちらも行動的で元気な女性を描き、高齢化社会の未来を予見しているようだ。

（清水勲）

江戸名所道化尽 十九
歌川広景　安政 6 年（1859）
「大橋の三ツ股」

大橋は隅田川にかかる両国橋の通称。夏はここから飛び込む人が大勢いた。運悪く「水菓子・亀屋」の舟の上に落ち大さわぎ。亀屋は舟で遊覧する客たちにすいかを切り売りしているようだ。遠くに富士が見える。

（清水勲）

その他事業

原画ダッシュ 2018 年度事業

ささやななえこ原画ダッシュ （2018 年度制作 ）

原画 ’（ダッシュ）について

「原画 ’（ダッシュ）」とは、コンピューターに原画を取り込んで色調整を重ねた上で印刷された、原画と並べても見分けのつかないほど精巧なマンガ原稿の複製である。退色しやすいデリケートなマンガ原稿の保存と公開を両立させるために開発され、マンガ家で京都精華大学教授の竹宮恵子氏をプロジェクトリーダーに、京都精華大学国際マンガ研究センターと京都国際マンガミュージアムが共同で研究を進めている。

原画 ’（ダッシュ）の制作

原画 ’（ダッシュ）プロジェクトは、2001 年以来、作家 25 名の約 800 点の「原画 ’（ダッシュ）」を制作してきた。2018 年度には、マンガ家の東浦美津夫とささやななえこの原画 ’（ダッシュ）、それぞれ 30 点と 36 点が新しく作られた。

原画 ’（ダッシュ）展覧会の企画・実施

原画 ’（ダッシュ）は、破損や紛失したら取り返しがつかない原画に替わって、国内だけでなく、フランス、ドイツ、オーストラリアなど、海外の展覧会にも積極的に出品されている。2018 年度には、国内外で累計 163 点の原画 ’（ダッシュ）が展示された。静岡県磐田市の香りの博物館で行われた「原画 (ダッシュ) で見る 昭和の少女マンガ展 ～可憐な乙女たち～」をはじめ、2017 年に続き、期間を延長して 2018 年にも開催された「MANGAMANIA」展、「謎だらけの少女マンガ」展（フランス・アルザス地方）が開催された。2019 年度に大英博物館で行われるマンガ展への出展もすでに決まっており、今後も原画 ’（ダッシュ）は日本のマンガ文化を広める一翼を担っていく見込みである。

（ ユー・スギョン ）

東浦美津夫原画ダッシュ （2018 年度制作 ）

「MANGAMANIA」展

期間：2017 年 4 月 13 日 - 2018 年 9 月 28 日

会場：ドイツ、Scholess Augustusburg（アウグストゥスブルク城）

主催：Scholess Augustusburg（アウグストゥスブルク城）

協力：京都精華大学国際マンガ研究センター / 京都国際マンガミュージアム

内容：日本とドイツにおけるマンガ文化の発展に関連した展覧会。江戸時代の浮世絵、マンガの歴史やマンガ作品などを紹介。マンガコーナーの一部として、わたなべまさこ先生の原画 ’（ダッシュ）10 点を用い、「Beauty and Fashion」というテーマで展示・紹介。マンガ年表や、江戸戯画の複製画も展示協力した。

「原画 (ダッシュ) で見る 昭和の少女マンガ展 ～可憐な乙女たち～」展

期間：2018 年 10 月 27 日 - 2019 年 1 月 14 日

会場：磐田市香りの博物館

主催：磐田市香りの博物館

協力：京都精華大学国際マンガ研究センター / 京都国際マンガミュージアム、高砂香料工業株式会社

内容：現代のマンガ文化の礎を築いた昭和の少女マンガと作品に描かれた花の香りなどを紹介した展覧会。松本かつぢ、今村洋子、水野英子、花村えい子、高橋真琴、牧美也子、わたなべまさこ、巴里夫、北島洋子の原画 ’（ダッシュ）80 点が展示された。

「謎だらけの少女マンガ」展

期間：2019 年 2 月 8 日 - 2 月 28 日

会　場：Conseil Départemental du Haut-Rhin/ Médiathèque départementale du Sundgau

主催：CEEJA（Centre Européen d’Etudes Japonaises d’Alsace）/ 京都国際マンガミュージアム / 京都精華大学国際マンガ研究センター

内容：「少女マンガって、何？」、「少女マンガの作家は女性だけ？」など、よくありがちな少女マンガに関する 7 つの質問について、原画 ’（ダッシュ）を用いて説明する展覧会。上田としこ、花郁悠紀子、高橋真琴、竹宮惠子、ちばてつや、藤井千秋、牧美也子、花村えい子、巴里夫、わたなべまさこ、上原きみ子、北島洋子の原画 ’（ダッシュ）70 点を展示。関連イベントとしては、マンガ制作ワークショップなども開催された。

文化庁メディア芸術連携促進事業連携共同事業「マンガ原画に関するアーカイブ（収集、整理・保存・利活用）および拠点形成の推進」

マンガのアーカイブに関わる各施設・団体の連携の下、マンガ原画のアーカイブ――〈収集〉〈保存・整理〉〈活用〉を実践し、施設や個人等の属性や目的に応じたアーカイブモデルを開発、提案することを目的とする文化庁業務委託事業のコーディネイトを、IMRC が担った。

（伊藤遊）

事業の目的

5ヶ年計画の4年目となる本年度の主要な目的は以下の2点である。

1）マンガ原画のアーカイブモデルの開発・提案

これまでのメディア芸術連携促進事業・連携共同事業の成果を継承・発展する形で、施設や個人等の属性や目的に応じたアーカイブモデルを開発・提案する。

2）連携機関とのネットワーク構築とハブ拠点の形成準備

マンガ原画の収蔵や活用を推進する体制を整えるため、「マンガ原画アーカイブセンター（仮称）」を「横手市増田まんが美術館」内に設置することを目指し、その準備に着手する。

実施内容

各連携機関において、それぞれが収蔵しているマンガ原画の〈収集〉〈整理・保存〉作業を進めた。
また「原画ダッシュ部会」、「支持体・画材研究部会」、「モデルチャート部会」の各部会がマンガ原画の〈収集〉〈整理・保存〉〈活用〉に関わる調査・研究と実践を行った。
シンポジウム「マンガ原画アーカイブセンター（仮）の創設に向けて」（於・横手市ふれあいセンターかまくら館、2019年2月3日（日）10:00 - 15:00）では、各連携機関によって、上記実践と研究の内容が発表され、一般参加者も交えて「原画アーカイブモデル」及び「マンガ原画アーカイブセンター（仮称）」の在り方を検討した。

担当研究員：伊藤遊（メインコーディネイタ）
倉持佳代子（プロジェクト運営補助）
吉村和真（プロジェクト推進オブザーバー）

連携機関・団体

・明治大学 米沢嘉博記念図書館
・北九州市漫画ミュージアム
・一般財団法人パピエ（谷口ジロー作品版権管理団体）
・横手市増田まんが美術館
・学校法人専門学校 東洋美術学校

実施体制

事業内容に応じて、「原画ダッシュ部会」（所管：IMRC）、「支持体・画材研究部会」（所管：東洋美術学校）、「モデルチャート部会」（所管：IMRC）を設置し、研究や事業の推進が図られた。
各施設と各部会における作業状況等の共有や、事業全体の進行管理は、京都精華大学国際マンガ研究センターが担当した。

＊ 同事業の最終報告書 PDF は以下でダウンロード可
https://mediag.bunka.go.jp/article/article-14894/

その他事業

京都国際マンガミュージアム / IMRC 所蔵資料の提供事例集

資料名	データ／現物	提供先	用途
『絵新聞日本地』第 1 号、表紙	データ	時事通信社	新美琢真氏による新聞記事 「漫画家参上！　1　絵新聞日本地」の図版として、2018 年 3 月 11 日付『静岡新聞』などへの掲載
わたなべまさこ原画ダッシュ作品 10 点	現物	Scholess Augustusburg（アウグストゥスブルク城）	「MANGAMANIA」展 （於・ドイツ Scholess Augustusburg、2017 年 4 月 13 日～ 2018 年 9 月 28 日）における展示
水木しげる 「辺境ある記」『週刊漫画サンデー』1974 年 6 月 15 日号、実業之日本社、1974 年	データ	講談社コミッククリエイト	『水木しげる漫画大全集 水木しげる人生絵巻／わたしの日々他』（講談社）への掲載
谷ゆき子 「のろいのトゥシューズ」「白鳥ののろい」原画 58 点	現物	図書の家	谷ゆき子著、図書の家編『まりもの星』（立東舎）への掲載
『りぼん』ふろく資料約 2000 点	現物	集英社	『りぼんのふろく「カワイイ」のひみつ』（集英社）への掲載
1）『大阪パック』第 5 年第 22 号、大阪パック社、1910 年（「社会主義症全滅」掲載ページ） 2）『大阪パック』第 12 年第 13 号、大阪パック社、1917 年（「鋤鍬捨てゝ」掲載ページ） 3）『東京パック』第 9 巻第 5 号、有樂社、1913 年（「羊頭を掲げて狗肉を売る」掲載ページ） 4）『東京パック』第 9 巻第 5 号、有樂社、1913 年、表紙 5）『大阪パック』第 11 年第 21 号、大阪パック社、1916 年、表紙	データ	滑川市立博物館	「米騒動 100 年 滑川から全国へ」展（於・滑川市立博物館、2018 年 7 月 28 日～ 9 月 2 日）におけるパネル展示および同展カタログへの掲載
『絵新聞日本地』第 1 号、表紙	データ	大阪府立中央図書館国際児童文学館	企画展「発見！『明治ポンチ本』　明治末期の出版流通空間」（於・大阪府立中央図書館国際児童文学館、2018 年 8 月 1 日～ 10 月 31 日）におけるパネル展示
石川進介 「列外に気を取られるな」『漫画』第 8 巻第 9 号、漫画社、1940 年	データ	河合出版	『2019　センター試験直前対策問題集　Vol.13　日本史 B』への掲載
「芋喰僧正魚説法」他江戸・明治戯画錦絵 38 点	現物	福井県立若狭歴史博物館	「うきたつ人々　幕末若狭の祭礼・風俗・世相」展（於・福井県立若狭歴史博物館、2018 年 10 月 6 日～ 11 月 11 日）における展示および同展カタログへの掲載
松本かつぢ、今村洋子、水野英子、花村えい子、高橋真琴、牧美也子、わたなべまさこ、巴里夫、北島洋子原画ダッシュ作品 80 点	現物	磐田市香りの博物館	「原画’（ダッシュ）で見る 昭和の少女マンガ展～可憐な乙女たち～」展（於・磐田市香りの博物館、2018 年 10 月 27 日～ 2019 年 1 月 14 日）における展示
『ビッグコミック』（小学館）創刊号ほか 122 点	現物	小学館集英社プロダクション	「ビッグコミック 50 周年展」（於・川崎市市民ミュージアム、2018 年 11 月 10 日～ 1 月 14 日）における展示
1）小野佐世男「東京ヂヤズ狂想曲『東京パック』第 19 巻第 10 号、有樂社、1930 年 2）『月刊漫画ガロ』1964 年 9 月号～ 1971 年 10 月号（全 96 冊）、青林堂、1964 年～ 1971 年	現物	兵庫県立美術館	「Oh ！マツリ☆ゴト　昭和・平成のヒーロー＆ピーポー」展（於・兵庫県立美術館、2019 年 1 月 12 日～ 3 月 17 日）における展示および同展カタログへの掲載

IMRC 研究員業績等
（2018 年 1 月 ~ 12 月）

伊藤遊　Ito Yu

論文・解説など

○「押切蓮介単行本解題」（「でろでろ」「椿鬼」「おどろ町モノノケ録」「暗い廊下とうしろの玄関」）『ユリイカ』2018 年 4 月号［特集＊押切蓮介］、青土社、2018 年 4 月、pp.225-240

○「〈マンガ環境〉を考える――「マンガミュージアム」の困難と可能性」『Library Resource Guide』2018 年夏（第 24）号、アカデミック・リソース・ガイド、2018 年 9 月、pp.86-91

○「平成怪談漫画の 30 年――〈心理学化〉〈日常化〉〈キャラ化〉」『幽』第 30 号、KADOKAWA、pp.90-93

◇『幽』ブックレビュー（KADOKAWA）、季刊連載

◇『朝日新聞』（大阪版夕刊）「いまどきマンガ塾」他研究員とリレー連載

◇『朝日中高生新聞』「こちら国際マンガ研究センター」他研究員とリレー連載

その他

○ 科学研究費助成事業（基盤 C）「文化施設におけるマンガ展示手法の共有のためのツール開発に向けた研究」研究代表者

○ 科学研究費助成事業（基盤 C）「「学習マンガ」の表現構造と制作現場における意味生成プロセスの実証的研究」（研究代表者＝山中千恵）研究分担者

○ 科学研究費助成事業（挑戦的萌芽）「学習マンガの表現構造及びジャンル確立過程に関する実証研究 - 1970 年代以降中心に」（研究代表者＝山中千恵）研究分担者

倉持佳代子　Kuramochi Kayoko

論文・解説など

○「押切蓮介単行本解題」（「ぼくと姉とオバケたち」「サユリ」「押切蓮介作品集」）『ユリイカ』2018 年 4 月号［特集＊押切蓮介］、青土社、2018 年 4 月、pp.225-240

○（緒言）「はじめに－「星」シリーズ連続刊行によせて -」谷ゆき子著、図書の家編『完全復刻　まりもの星』立東舎、2018 年 5 月

○「寄稿　里中満智子を語る 『少女マンガを変えた本格的な「愛」の物語』」高志の国文学館編『里中満智子「愛」のテーゼ』シー・エーピー、2018 年 8 月、pp.111-116

○（インタビュー）「私が 250 万乙女だったころ」『りぼんのふろく「カワイイ」のひみつ』集英社、2018 年 8 月、pp.90-91

○「解説　花と洋館とファッションと。その先駆性と普遍性」『わたなべまさこ　名作セレクション－花と洋館とファッションと－』河出書房新社、2018 年 9 月、pp.382-387

○（緒言）「はじめに－さよなら星の向う側－」谷ゆき子著、図書の家編『完全復刻　さよなら星』立東舎、2018 年 11 月

◇『ダ・ヴィンチ』「出版ニュースクリップ・マンガ」連載～ 2018 年 5 月号

◇『読売新聞』（全国版夕刊）「いちおし！」隔月連載

◇『朝日新聞』（大阪版夕刊）「いまどきマンガ塾」他研究員とリレー連載

◇『朝日中高生新聞』「こちら国際マンガ研究センター」他研究員とリレー連載

その他

○ 第 22 回文化庁メディア芸術祭マンガ部門選委員

雑賀忠宏　Saika Tadahiro

論文・解説など

○「ビッグコミック 50 年の歩み」「忘れがたき名作たち」『ビッグコミック』2018 年 3 月 10 日号～ 5 月 10 日号、小学館

○「描け、暴力的に ”「マンガ家マンガ」としての『狭い世界のアイデンティティー』」／「押切蓮介単行本解題」（「ゆうやみ特攻隊」「プピポー！」「ミスミソウ」「猫背を伸ばして」「焔の眼」「狭い世界のアイデンティティー」「押切蓮介劇場マサシ !! うしろだ !!」「カイキドロップ」）『ユリイカ』2018 年 4 月号［特集＊押切蓮介］、青土社、2018 年 4 月、pp.217-224 ／ pp.225-240

○「後藤広喜『少年ジャンプ 黄金のキセキ』書評」『週刊読書人』2018 年 7 月 6 日号（第 3246 号）、読書人、2018 年 7 月

○「読書案内 いまこそ、読むべき作品⑩」『サライ』2018 年 9 月号［大特集『ビッグコミック』創刊から半世紀］、小学館、2018 年 9 月

◇『朝日新聞』（大阪版夕刊）「いまどきマンガ塾」他研究員とリレー連載

◇『朝日中高生新聞』「こちら国際マンガ研究センター」他研究員とリレー連載

ユー・スギョン　Yoo Sookyung

論文・解説など

○「漫画の原画は販売のためのものか」『韓国漫画政策研究所レポート』2018 年 6 月号（第 11 号）、（社）ウリ漫画連帯付設漫画政策研究所、pp.3-4

○「漫画村でみる日本海賊版サイトの現状」『韓国漫画政策研究所レポート』2018 年 8 月号（第 13 号）、（社）ウリ漫画連帯付設漫画政策研究所、pp.7-8

○「海外でも読みつがれる人気の理由」『わたなべまさこ　名作セレクション－花と洋館とファッションと－』河出書房新社、2018 年 9 月、pp.388-89

◇『朝日中高生新聞』「こちら国際マンガ研究センター」他研究員とリレー連載

應矢泰紀　Oya Yasunori

論文・解説など

○「旭川発 故郷のうた『Frozen Stars In Your Eyes』」（アニメーション制作）NHK 旭川放送局、2018 年 3 月

○「京都の妖怪 10 選」ジェイアール京都伊勢丹、2018 年 10 月

吉村 和真　Yoshimura Kazuma（マンガ学部教授・副学長）

論文・解説など

○『障害のある人たちに向けた LL マンガへの招待―はたして「マンガはわかりやすい」のか』（藤澤和子 / 都留泰作と共編著）樹村房、2018 年 8 月

○「ギャンブルマンガのメディア論―『パニック 7』という名のパチスロマンガ雑誌が賭けたもの―」日本記号学会編『賭博の記号論』、新曜社、2018 年 9 月

◇『朝日中高生新聞』（大阪版夕刊）「いまどきマンガ塾」を研究員とリレー連載のほか、雑誌・新聞などに寄稿多数。

◇国際日本文化研究センター客員教授（2016 - 2018 年）。また省庁や自治体等の複数事業に有識者として参画。